

二〇二三年度

二月四日午後入試（第六回）

国語（45分）

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんに、はつきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、
6－1 から
6－12 まであります。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。）

江戸時代のことである。ゆう福で格式の高い武士・佐野藤右衛門の妻「やす」が病気でなくなった。藤右衛門は、むすこである格之助と金三郎に二人で通夜（遺体のそばで一晩中過ごし、遺体を守ること）をするように言いつけ、自分の部屋にもどった。ところが、しばらくすると遺体が安置されている部屋のほうからお経を読む声^{きやう}が聞こえてくる。おかしいと思った藤右衛門はむすこを呼びつけた。

来たのは金三郎であった。

「お呼びでございますか。」

「仏前にまだ誰^{だれ}ぞおるか。」

「はい。」

障子のそとで、金三郎が廊下^{ろうか}に手をつくさまが感じられた。

※^{ずきよう} 誦経の音がするではないか、誰だ。」

「……はい。」

「誰^{だれ}々がおるのだ。」

「はい。家士^{かし}、しもべの女房^{にようぼう}でもでございます。」

金三郎の声は苦しそうだ^①。藤右衛門の眉^{まゆ}がけわしく歪^{ゆが}んだ。掟^{おきて}のきびしい武家屋敷^{やしき}では、家士しもべの女房^{にようぼう}などが、みだりに奥^{おく}へはいることはゆるされない。それで藤右衛門は怒^{いか}りを抑^{おさ}えながら云^いった。

「誰^{だれ}がゆるしてさようなことをした、伽^がはそのほうと格之助でせよとかたく申しつけたではないか、ならんぞ。」

「父上、おねがいでございます。」

しずかに障子をあげ、廊下^{へいやく}に平伏^{へいふく}したまま金三郎は訴^{うった}えるように云^いった。

「あの者どもは母上を、つねづね実の親のようにもおしたい申しおりました。あの者どものかなしみは、世間^{よこ}ふつうのしもべが主人をうしなつたのとは違^{ちが}います、肉親の母親をなくしたよりもつらいのです。兄上にもわたくしにもそれがよくわかります。とてもゆるさぬとは申せませぬ、父上。どうぞ今宵^{こよひ}一夜^{ひとよ}のお伽^がをゆるしておやり下さい、おねがいでございます。」

藤右衛門はしばらく眼をとじていたが、やがて低く呟^{つぶや}くように云^いった。

② 「……よい、ゆけ。」

金三郎は障子をしめて去った。

しもべの女房たちまでが、実の親のようにしたつていたという。それは考えるまでもなく差別[※]を無視した云いかたである、日頃^{ひじろ}の藤右衛門なら一言のもとに叱^{しか}りつけるところだった、けれども金三郎の言葉のなかにはなにか心をうつものがあつた、主人を親よりもたいせつに思うということは、当時の世風としてはきわめてあたりまえなことだ、然し金三郎の言つた意味はそのようなものではない、もつとふかく、もつとじかに訴えてくるものがあつた。それは亡^なき妻と、かれらのあいだだけにゆるされるもので、彼^{かれ}にはうかがい知れることもできず、また拒^{こは}む余地もないことがらのように思えた。——あれはどのようなことをしてやったのであろう。藤右衛門はまたしても、自分の知らぬ妻の一面をみつけておどろかされた。

※^{かんきん} 看経の声はしめやかにつづいていた。※^{このつ} 十二時をまわってから、それがちよつと途絶^{とだ}えたので、香^{かう}をあげようと思つて立つていったが、襖^{ふすま}のそとまでゆくと、部屋のなかで人々のむせび泣く声^{こゑ}がしていた。それはい

ままで誰が泣いたよりも悲痛な、胸を刺しとおす響きをもっていた。かれはそのままそつと廊下へ戻った、すると、格之助が居間からあらわれた。

「あの者たちに夜食をだしてやれ。」

藤右衛門はそう云つて書斎へかえつた。

葬儀はその翌日におこなわれ、なきがらは城西の金竜寺にほうむられた。式のしだいは質素であつたが、藩侯から特に使者がつかわされたりして、思いがけなくも名譽なものになつた。ほうむりの日の朝から、藤右衛門は書斎にこもつて「松の花」の校閲をつづけた。それまで身のまわりの世話は格之助の嫁にさせていたが、それをやめて松田吉十郎という若侍のうけもちにした、そして食事もずつと書斎へはこばせ、藩譜編纂の用務のある者のほかにはほとんど客に会わなかつた。夜ごと、夜ごと、燭のしたで朱筆をとっている彼の耳に母屋の方で音をしのばせて看経する人声がかすかに聞こえた。――またあの女房どもか、はばかりがちな低い声でそれは直ぐわかつた。またしじまのおりには、庭むこうの家士長屋の方からも、むせぶような念仏の声のつたわつて来るものがあつた。どちらも遠くへだたつたところから途切れ途切れに聞えて来るのだが、その声には肺腑をしぼつて哭くものの底知れぬなげきがこもっていた。――どうして妻はあれほどのなげきをかれらに与えるのか、かれらにとつて妻はそれほどおきな存在だったのか。藤右衛門は校閲の筆をやすめて、いくたび不審にうたれたか知れなかつた。初七日の法会がすんだ夜である。ひさびさに子供たちと食事をした藤右衛門は、まえから考えていたのであるう、格之助を呼んで、今宵から屋敷うちで看経はならぬと云つた。

「供養はいちどに仕すませるものではない、十日二十日の看経より、ながく心にとめて忘れぬこそ、仏へのまことの回向だ。」

「よくそう申し聞かせて。」

と藤右衛門はつづけて云つた。

④「今宵からはかたく無用だと云え、それから、その者どもにやすのかたみわけをして遣わそうと思うがどうか。」

「かたじけのう存じます、わたくしからおねがい申すつもりでおりました、さぞよろこぶことでございましょう。」

「それでは遣わすべき者を呼んでまいれ。」

そう云つて藤右衛門は立つた。

※婢頭のそよをつれて亡き妻の居間へはいつていったとき、呼びあげられた家士やしもべの女房たちが、次の間にひかえて平伏していた。部屋のあるじが一年あまりの病間ぐらして、ながらく使わずにあつたためか、そこには婦人の居間らしいなんのにおいもなく、年代を経て古くつやを帯びた調度類が、塵もとめぬ清浄さできちんとならんでいるだけだった。

「こういう品をお出し申しましよう。」

「どれでもよい、わしが選ぶから順にとりだしてくれ。」

「かしこまりました。」

そよは先ず古いほうの簞笥をあけ、抽出の中からつぎつぎに衣類をとりだして藤右衛門の前へならべた。

「格之助、おまえもなみになにか選んでやれ。」

藤右衛門は燭をあかるくして、そう云いながら格之助とともに衣類を選みはじめた。

それはみんな着古した木綿物だった、すっかり洗ひぬいて色のさめたものや、たんねんに継をあてたもの

ばかりだった。——こんなものを大切そうに簞笥へしまつて置くなどとは。そう思いながらみていくと、取り出されるものみな木綿で、どれもいくたびか水をくぐり、なんだか仕立て直された品ばかりである。夏のものの冬のものみんなおなじだった。ややみられたのはふたかさねの紋服と紋服用の帯であったが、そのほかはどれひとつとして新らしいものはなく、まして絹物はひと品もなかった。

「これでもいいか。」

⑤ 藤右衛門はなかばあきれて訊いた。

「はい、あとはお髪道具がひとそろえあるだけでございます。」

「そのほかにはもうないのか、まったくこれでしまいなのか。」

「……はい、お納戸の長持には、まだお着古しもございますけれど、もう継ぎはぎもならぬほどのお品で、ひとの眼に触れては恥ずかしいゆえ、よいおりをみて焼き捨てよ、との仰せでござりました。」

そう云つてそよははらはらと泣いた。藤右衛門はもういちどそこにある衣類をとりひろげてみた。洗い清めてはあった、どんなちいさなやぶれ目にもきちんと継がえてあった、けれどもかたみわけとしてひとに遣るには、あまり粗末な品々である。藤右衛門はまだ茫然とした気持からさめることができず、ふりかえつて格之助の顔を見た。

「これでは、いかにもみぐるしすぎるように思うが、どうか。」

「母上が身におつけになった品ですから、お遣わしになつてよろしかろうと存じます。わたくしも一枚、なみに頂戴いたします。」

格之助はそう云つて、まず自分から古びた袷一枚ぬきとつた。それで藤右衛門もはじめてそよに領いてみせた。

「ではよいようにわけてやれ。」

「かたじけのう頂戴つかまつりまする。」

そよはすり寄つて、その衣類を敷居ぎわまではこんだ、そして次の間に平伏している女房たちにむかつた、しずかに涙を押しぬぐいながら云つた。

「旦那さまのおぼしめしで、亡き奥さまのおかたみわけをいたします。……おまえさまたちも知っているとおり、つねづね奥さまはおそれおおいほど、つましいくらしをあそばしておいででした。これまでわたくしたちお末の者が、祝儀不祝儀につけて頂いたものは、それぞれ新らしくお買い上げになった高価な品ばかりでした。おまえさまたちのなかにも羽二重なり、小紋なり、結構な晴れ着の一枚二枚頂戴しないかたはひとりもないと存じます。わたくしどもにはそれほどお心をかけて下さいましたのに、奥さまがお身につけておいであそばしたのは、みなこのような御質素なお品でした。このお品をよく拝んで下さい。」

⑥ そよは衣類をさし示しながら云つた。

「ここにあるのが、紀州さま御老職、千石のお家の奥さまがお召しになったお品です。わたくしたちには分にすぎたくだされものをあそばしながら、御自分ではこのような品をお召しになつていたのです。……この色のさめたお召物をよく拝んで下さい、継のあたつた、このお小袖をよくよく拝んで下さい。」

そよの喉へ鳴咽がせきあげた、女房たちも声をころしてむせびあげた。藤右衛門はその鳴咽に追われるもののように、卒然と立つてその部屋を出た。

居間へはいると直ぐ格之助が追つて来た。

「御きげんを損じましたでしょうか。」

彼は父の眼を見上げながら云つた。

「そ、が申しすごしましたなら、わたくし代^{かわ}ってお詫^わびをいたします。あのような氣性^{きしょう}でございますから、母上のおかたみを見てとりみだしたのでございます、どうかゆるしてやって頂きとうございます。」

「べつにきげんを損じはせぬ、けれども。」

藤右衛門は壁^{かべ}をみつめながら、

「や、すはどうしてあのような物を、あのようなみぐるしい物を身につけていたのだ。わしはすこしも気がつかなかった、本当にあんなものしか持っていなかったのか。」

「母上は、つましいことがお好きでございました。」

「それだけか、つましくすることが好きだから、それだけであのような粗末^{そまつ}なものを身につけていたというのか。」

格之助はふかく面^{おもて}を伏せていたが、やがて低い声で呟^{つぶや}くように云った。

「……お召物^{めしもの}だけではございません。お身まわりのことすべてをつましくしておいででした。かようなことを申し上げましては母上のお心にそむくかとも存じますが、母上はいつかこのように仰^{おほ}せられていました。……武家の奥^{おく}はどのようにつましくとも恥^{はじ}にはならぬが、身分相應の御奉公^{ごほうこう}をするためには、つねに千石千両の貯蓄^{ちよちく}を欠かしてはならぬ。」

格之助がそう云うのを聞きながら、藤右衛門はふと、息をひきとったばかりの妻の手の触感^{しよつかん}を思いだした。夜具のそこにはみ出ていたのをいれてやろうとして、なにげなく握^{にぎ}った妻の手はひどく荒れてざらざらとしていた。

「それはおまえに云ったのか。」

「いえ、な、みをめとりましたとき、あれにそうおさとしくだすったのです。わたくしは次の間からもれ聞いたのですが……はじめて母上の御日常がわかったと思いました。」

藤右衛門はじつと自分の右手をみまもっていた。その右のたなごころには、まだあのときの触感^{しよつかん}がのこっているようだった。——千石の奥の手ではなかった。あの皮膚^{ひふ}のかたさ、ひどく荒れた甲^{こう}は、千石の家の主婦^{むすめ}のものではない、朝な夕な、水をつかい針を持ち、厨^{くりや}にはたらく者とおなじ手であった。

や、す女は大御番頭^{おおごばんがしら}九百石^{こく}の家に生^うまれ、五人きょうだいのなかのただ一人の娘として家族の愛をあつめてそだてられた。顔だちもまるくおっとりとしていたし、たちいふるまいものびやかで、彼女^{かのじょ}がとついで来てからは、きゆうに家のながが春風のふきとおるようなにおやかな気分につつまれたものである。よそよりもちだんと家法のきびしい、規矩^{きく}でかためたような佐野家^{さのけ}の日常とはまるでかけはなれた、のびのびとした雰囲氣^{ふんいき}を身にもっていた。——これで家政のたばねができるだろうか。はじめのうち藤右衛門はいつもそれを案じていたくらいだった。そういうかんじはいつまでも頭から去らなかつた。代々質素^{ちしよ}だいたいちの家風で、家計はゆたかであったし、召使^{めしつかい}の数もおおく、や、す女はただ主婦という位置にすわっているだけでよかった、なんの苦勞もなく心配もないはずだった。藤右衛門はそう思っていたし、事実また彼の眼^めにうつる妻の姿は、いつまでもとついで来たときとおなじのびやかさ、明るくおっとりして、千石の老職の妻というおちついたかんじでしかなかったのである。あのひどく荒れた手に触れたとき、藤右衛門はまったく意外だった、皮膚の荒れたその手と、彼の印象にある妻とはどうしても似あわず、自分のまったく知らなかつた一面にはじめて触れたような氣持^{きもち}だった。

「これほどのことに、どうして気がつかなかつたのであろう。」

格之助が去ってから、茫然^{ぼうぜん}と自分の手をみまもっていた藤右衛門は、ふとそう呟^{つぶや}きながら面^{おもて}をあげた。三十年もひとつ家の内に起き伏しして、二人の子まで生^なした夫婦^{ふうふ}でありながら妻の本当のすがたというも

のを知らずにすごして来たことが、はじめていま彼にわかった。千石の家の夫人として、なんの苦勞もなく、のびやかにくらしているとばかり思っていたが、それは妻のすがたのほんの一部分でしかなかったのだ。良人の眼にもつかず、まして世の人には窺い知ることもできぬところで、妻はそのつとめを全身ではたしていたのだ。

「そうだ、いまにして考えれば思いあたることかしばしばあった。」

藤右衛門はふたたび低く呟いた。

まえにも云ったとおり、佐野家はもととゆたかな家計をもっていた。けれどもきまった食禄でまったくの消費生活をするということは考えるほどたやすくはない。物価のうごきや家族の増減、そのほか眼にみえぬところで出費は年々とかさんでゆくのがふつうだった、しかも武家には格式というものがあって、千石は千石だけの体面を保たなくてはならぬ。佐野家がいかによたかな家計をもっていたとしても、これをうけつぐ者にすこしのゆだんでもあれば、たちまち底を洗うことはわかりきったはなしだ。藤右衛門は藩の御勝手ばかりとして、四十余年のあいだしばしばそれを痛感して来た。紀州五十余万石の経済ではそのことを痛いほどかんじながら、自分の家のことにはまったく関心をもたなかった。ある年、家臣一統から藩へ献上金をすることがあった、そのとき佐野家からは三百金ずつ前後数回にわたって献上した。——噂にたがわず佐野家は内福だ。家中の人々はそう云って舌を巻いたが、藤右衛門はそれほど考えず、自分の家計としてはごくあたりまえだと思っただけであった。そういう例はすくなくない、藩の御勝手ついでで食禄のわたらぬことがつづくとか、非常な物価昂騰とか、百人に近い家士たちのために、年々更新しなければならぬ武具調度の費用とか、ほとんど不時の出費のたえることはないといつてよかった。それを佐野家ではきわめてぶじにすごして来た、藤右衛門はどんなばあいにも心を労することなく、うちこんで御奉公をすることができたのである。そして今日まで、それをあたりまえなこととして、誰のたまものとも考えることはなかったのだ。」「なんとという迂闊なことだ。なんとという愚かな眼だ。自分のすぐそばにいる妻がどんな人間であるかさえ己は知らずにいた。」

⑪ 藤右衛門はおのれを責めるように呟いた。

「佐野の家があんのんにすごして来たのも、自分がぶじに御奉公できたのも、蔭にやすの力があつたからではないか、こんな身近なことが自分にはわからなかった、妻が死ぬまで、自分はまるでちがう妻をしか知らなかったのだ。」

⑫ いたましく皮膚の荒れた手ゆびと、あのように粗末な遺品をとおして、いまこそ藤右衛門にはまことの妻がみえはじめたのである。彼の心にあった空虚な感じはいつかぬぐい去られたように消えて、その代りに新しい感動がおおきく脈を搏ち出した。……藤右衛門は立って居間を出た、松田吉十郎がついて来て、書斎に灯をいれて去った。

⑬ 藤右衛門は机の前にすわった。そこには彼が校閲しかけている稿本が置いてある。藤右衛門はその表紙の「松の花」という題簽をあらためて見なおした、松の緑はかわらぬ操の色だ、そこに撰まれたのはあらゆる苦難とたたかった女性たちの記録である、いまの世にひろめ、のちの世に伝えて、人の心をふるいたたしめる烈女節婦の伝記だ。

「けれども……」

藤右衛門は低く呟きだした。

「烈女節婦はこのように伝記に撰せられるものだけではない、世の苦難をたたかいぬいたこれらの婦人は頌

むべきだ。しかし世間にはもっとおおくの頌むべき婦人たちがいる、その人々は誰にも知られず、それとかわれに遺ることもしないが、柱を支える土台石のように、いつも蔭にかくれて終ることのない努力に生涯をささげている。……これらの婦人たちは世にあらわれず、伝記として遺ることもないが、いつの時代にもそれを支える土台石となっているのだ。……この婦人たちを忘れては百千の烈女伝も意味がない、まことの節婦とは、この人々をこそさすのでなくてはならぬ。」

藤右衛門は呟きおわって空へ眼をあげた。彼はいま稿本「松の花」に序すべき章句をおもいついたのである。まつりごとをあずかるものの心すべきは、みえざるところをおろそかにせぬことだ、「松の花」はあらわれた烈女たちを伝えるだけでなく、世にかくれたる節婦のおおいことをもあきらかにすべきである、「……やす。」藤右衛門は夜の空に妻のおもかげを描きながら呟いた。

「おまえはわしに世にあらわれざる節婦がかなるものかを教えてくれたぞ。」

そして稿本をひらき、しずかに朱筆をとりあげた。

(山本周五郎「松の花」より)

※(注)

- 誦経……………死んだ人のためにお経を読むこと。
- 家士……………武家に仕える者。
- 女房……………ここでは、武家に仕える女性をさす。
- 伽……………通夜。
- 差別……………ここでは、けじめ。
- 看経……………お経を読むこと。
- 十二時……………午前0時ごろ。
- 藩侯……………藩は武士が支配する領地で、今でいう県のようなもの。藩侯は藩を治めている武士。
- 「松の花」……………藤右衛門が編集を命じられている書物の題名。
- 校閲……………文書の誤りや不備を正すこと。
- 藩譜編纂……………藩の歴史を記録、編集し、書物にすること。
- 回向……………死んだ人のために祈ること。
- かたみわけ……………死んだ人の持ち物を、生きている人たちにわけること。
- 婢頭……………めし使いの女性たちをまとめる役。
- なみ……………格之助の妻。
- 茫然……………おどろきあきれてぼんやりする様子。
- 袷……………裏地をつけた和服。
- つましい……………ぜいたくをしない。
- 祝儀不祝儀……………祝儀はお祝いごと。不祝儀はめでたくないこと。
- 羽二重……………絹織物の一種。
- 小紋……………細かい模様を染め出した和服。
- 紀州さま御老職……………紀州さまは紀州徳川家という武家。老職は主君の仕事を直接助ける重要な職。
- 千石……………「石」は、ここでは武士の年取をあらわす単位。
- 小袖……………そで口を狭く仕立てた和服。
- 嗚咽……………こらえきれず、声をつまらせながら泣くこと。

卒然 〓 〓 とつぜん。

奥 〓 〓 妻のこと。

厨 〓 〓 台所。

規矩 〓 〓 規則。

御勝手がかり 〓 〓 財政・会計を担当する役職。

稿本 〓 〓 書物の下書き。

題簽 〓 〓 書物の表紙に、題名を記してはる小さい紙や布。またその題名の文字。

操 〓 〓 心に決めたことを変えずにつらぬくこと。

烈女節婦 〓 〓 烈女も節婦も、自分の信念をつらぬきとおす女性。

頌む 〓 〓 ほめたたえる。

まつりごと 〓 〓 政治。

問一——線①「藤右衛門の眉がけわしく歪んだ。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 このときの藤右衛門の様子として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア おどろいている。
- イ 困っている。
- ウ おこっている。
- エ 悲しんでいる。

2 藤右衛門がこのような表情をした理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア むすこたちが、役目を家士しもべの女房におしつけていたから。
- イ 格之助が、父親に呼ばれているにもかかわらず来なかったから。
- ウ 金三郎が、父親に対してあれこれといいわけをしてきたから。
- エ 家士しもべの女房たちが、しきたりを破る行いをしていたから。

問二——線②「……よい、ゆけ。」とありますが、このときの藤右衛門についての説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア むすこが自分の言うことをきこうとしなかったので、いかりの思いをつのらせている。
- イ むすこの言葉に心を動かされ、たのみをうけいれてやろうという気持ちになっている。
- ウ むすこから思いがけず口ごたえをされ、おどろきのあまりものが言えなくなっている。
- エ むすこが言いつけを守ろうとしないので、もう何を言ってもむだだとあきらめている。

問三——線③「いくたび不審にうたれたか知れなかった。」とありますが、藤右衛門が「不審にうたれた」理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア やすの死が家に仕える女房たちに長く絶えない悲しみをもたらしていたから。
- イ やすのそう式をとり行ったときに藩侯から特別に使者がつかわれたから。
- ウ やすのために泣いている女房たちの声がやけに遠りよがちに感じられるから。
- エ やすのなきがらをほうむった日以降ほとんど客が自宅を訪ねてこないから。

問四 — 線④「今宵からはかたく無用だと云え」とありますが、藤右衛門は何を「無用だ」と言っているのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア やすのために念仏やお経を読むこと。
- イ 女房たちが母屋の内側まで入ること。
- ウ やすの死を家来がなげき悲しむこと。
- エ 母屋で看経する者に夜食を出すこと。

問五 — 線⑤「藤右衛門はなかばあきれて訊いた。」とありますが、藤右衛門はなぜ「あきれ」たのですか。簡潔に答えなさい。

問六 — 線⑥「そよは衣類をさし示しながら云った。」とありますが、そよは生前のやすの身なりと、やすの女房たちに対する行動についてどのようなことを語っていますか。解答らんの「こと。」につながるように三十五字前後で答えなさい。

問七 — 線⑦「藤右衛門はふと、息をひきとったばかりの妻の手の触感を思いだした。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

- 1 「妻の手の触感」はどのようなものだったのですか。文中から十五字でぬき出して答えなさい。
- 2 1のような「妻の手」を藤右衛門はどのような「手」と感じていますか。それがくわしく書かれている一文を文中からぬき出し、その初めと終わりの四字を答えなさい。

問八 — 線⑧「そうおさとしくだすったのです。」とありますが、「さとす」とは教えみちびくことです。やすがなみにさとした内容を文中から五十五字以上六十字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問九 — 線⑨「彼の印象にある妻」はどのような様子に見えていましたか。それを説明した次の文の□ A・Bにあてはまる言葉について、Aは後のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。Bは十三字で文中からぬき出して答えなさい。

□ A

性質で明るくおっとりしており、ゆう福な武士の妻として

□ B

主婦。

- ア おろかな
- イ にぎやかな
- ウ のびやかな
- エ せっかちな

問十 — 線⑩「舌を巻いた」のここでの意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 非常に感心して、おどろいた。

イ 感謝し、深く尊敬した。

ウ ひどくねたんで、かげ口を言った。

エ あきれて、口々にうわさをした。

問十一 — 線⑪「藤右衛門はおのれを責めるように呟いた。」とありますが、藤右衛門は自分のどのようなことを「責め」ているのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 妻が生前うったえていた不満に向き合おうとしなかったこと。

イ 自分の妻について限られた一面しかわかっていなかったこと。

ウ 佐野の家になじめずにいた妻を気づかってやらなかったこと。

エ 妻が病気にかかって死んでしまった原因が自分にあったこと。

問十二 — 線⑫「いまこそ藤右衛門にはまことの妻がみえはじめたのである。」とありますが、やすが本当はどのような妻であったのか、家計のやりくりという点について次のようにまとめました。次の文の□□□□□ A～Cにあてはまる言葉を、Aは三字、Bは五字で文中からぬき出し、Cは五字以内で考えて答えなさい。

夫がぶじに □□□□□ A □□□□□ ができるように、佐野家のゆたかな家計を □□□□□ B □□□□□ のことのように思

わせる努力を夫の □□□□□ C □□□□□ ところでし続けていた。

問十三 — 線⑬「『松の花』』とはどのような書物のですか。それを説明した次の文の□□□□□ A・Bにあてはまる言葉を、Aは十二字で文中からぬき出し、Bは五字以内で考えて答えなさい。

□□□□□ A □□□□□ をほめたたえ、世に広め伝えて人々の心を □□□□□ B □□□□□ ための伝記。

問十四 ――線⑭「まつりごとをあずかるものの心すべきは、みえざるところをおろそかにせぬことだ」とありますが、藤右衛門とうえもんがここで考えていることの具体的な説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 男性がつかさどってきた政治の世界に、世にかくれているすぐれた女性たちを参加させようと考えている。

イ 世の女性たちの伝記を調べ直し、やすこそが最もすばらしい女性であったことを証明しようと考えている。

ウ よりよい政治のため、これからは妻を見習ってどれほど困難な仕事でも全力でやりとげようと考えている。

エ 自分が編集している書物の序文に、世の表には現れてこない立派な女性たちのことを書くようと考えている。

問十五 藤右衛門はどのような人物としてえがかれていますか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 身分の差や上下関係に従うことをすべての行動の規準としており、それに反する言動は家族や身内であっても決して許さないがんこな人物。

イ 武家の長としての責任感にあふれた模範的な武士であり、子どもやめし使いが何かまちがったことをしても全くしからないやさしい人物。

ウ 決まりごとやけじめを重んじる厳格な人であるが、真心のある言葉や行動に対しては理解を示して自分もむくいようとする誠実な人物。

エ ちよつとしたことできげんを悪くするあらい性質の持ち主である一方、自分のまちがい気づけばすぐに改善しようとするいさぎよい人物。

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 故郷にジュンパクの雪がまう。
- ② フクザツな模様を織り成す職人の技術。
- ③ 書店で本をモトめる。
- ④ テレビのホウソウ局を見学する。
- ⑤ 受付で荷物をアズける。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 仕事の上では勤勉であることを心がける。
- ② 現地でしばらく待機する。
- ③ 知事の臨席をたまわる。
- ④ 人前で話すことにも少しずつ慣れてきた。

問三 次の①～④の熟語について、後の□の中の漢字を二つ組み合わせて、①・②は対義語を、③・④は類義語をそれぞれ作り答えなさい。ただし、使用しない漢字もあります。

- ① 延長
- ② 進化
- ③ 意見
- ④ 自立

立	単	退	縮	解	独	見	収	短	化
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

問四 次の①～③の——線部の中で、敬語の使い方として正しいものには○を、正しくないものは正しい形に直して答えなさい。

- ① ふるさとから届いたおかしのおすそわけを先生にさしあげる。
- ② あこがれていた歌人に初めてお目にかかった。
- ③ あなたのお料理、とてもおいしくめし上がりました。

問五 次の①・②の漢字の部首となる部分をぬき出して書きなさい。

- ① 絹
- ② 臓

